

# 公共的対話としての哲学カフェ

森 本 誠 一

## 1. はじめに

哲学カフェはフランスの哲学研究者マルク・ソーテ（1947-1998）が1992年にパリのバ스티ュー広場近くにあるカフェ・デ・ファールで始めた対話実践である<sup>1</sup>。ソーテが1998年に急逝した後も哲学カフェは広がり続け、現在では世界中で開催されている。日本でも1992年にソーテが来日した際に彼自身が進行役を務める哲学カフェが開催され、最近では全国各地で定期的で開催されるようになってきた。

なぜ哲学カフェはこのように受け入れられてきたのだろうか。また、哲学カフェが社会のなかでもっている意義とはどのようなものなのだろうか。本論文では公共的対話という観点から哲学カフェの意義について考察したい。

## 2. 哲学カフェとは

まず哲学カフェがどのようなものであるのか確認しておこう。とはいえ、哲学カフェについて積極的に定義するのは非常に困難である。どのような定義をしても哲学カフェを十分に捉えることはできないかもしれない。それは哲学や倫理学について定義することが困難であると同様である。そこで、ここでは哲学カフェにとって重要だと考えられる特徴をいくつか挙げることで、哲学カフェの輪郭を浮かび上がらせることにしたい。

---

<sup>1</sup> 1992年6月マルク・ソーテが自ら開設していた哲学相談所の様子を毎週日曜日にカフェ・デ・ファールで仲間うちに話しているとラジオ番組で紹介したところ、このカフェで哲学の議論が行われていると誤解したリスナーが集まってきたことが哲学カフェのきっかけであったとされている。（マルク・ソーテ（堀内ゆかり訳）『ソクラテスのカフェ』紀伊國屋書店、1996年、27-8頁）

## 2.1. 教師や生徒がいないこと

哲学カフェは講師や教師が参加者に対して何かを教えるようなものではない。つまり哲学カフェはそれに参加することによって何かを教えたり教えられたりするものではない。そこには教師もいなければ生徒もいない。したがって、哲学カフェに行けば何かを教えてもらえると思っている人は、哲学カフェに参加してがっかりすることになるだろう。哲学カフェの主催者が参加者に社会の問題をよく考えてもらおうと思って哲学カフェを始める場合、その哲学カフェはうまくいかないだろう。そこには無知な人びとを啓蒙してやろうという意図が隠れているのかもしれない。また、特定の問題を取り上げるときに、前提となる知識を参加者同士あるいは参加者と主催者側とで共有できていない場合には、主催者側がそれを説明しようとするかもしれない。そうすると、哲学カフェに参加すれば何かありがたいことを教えてもらえると思われている参加者は、容易に「教える／教えられる」という関係に陥ってしまうだろう。しかし、これは哲学カフェというよりも、講演会か講義と呼んだほうが適切だろう。「教える／教えられる」という関係を避けるためには、特定の具体的な問題から入らずに抽象的なテーマを選ぶのがよい。

## 2.2. 参加者は平等

哲学カフェのもう一つの特徴は、参加者同士が平等であるということである。あまりうまくいっていない哲学カフェでは、参加者同士の関係が水平ではないことが少なくない。参加者同士の関係が水平でない、どうしても発言が偏りがちになり、ある特定の参加者同士で話が閉じて完結してしまったり、一人の参加者が長時間話し続けたりということになりがちである。

また、哲学カフェには教師も生徒もいないため、教える進行役も教えられる参加者もいないし、参加者同士でも「教える参加者／教えられる参加者」が出てこないように工夫しなければならない。進行役には特別な役割が期待されるかもしれないが、それを除けばその場にいるすべての人が平等に議論するのが哲学カフェである。したがって、社会的地位や身分など、社会のなかでの関係

を哲学カフェに持ち込まないよう注意する必要がある。

講演会やセミナーでは質問する際に所属と名前を求められることがあり、それを省略していきなり質問しようとすると「すみません、まず始めにご所属とお名前を」と注意される。ところが、哲学カフェではむしろ所属や名前を言わないようにした方がよい。というのは、進行役と参加者、あるいは参加者同士が顔見知りであっても、お互いに名前で呼ばないようにしなければ、他の参加者は疎外感を感じて発言しづらくなるからである<sup>2</sup>。

また、哲学カフェで何かありがたいことを教えてもらえるものだと思っている人は、大学教授を名乗る人の話にはばかり集中して他の参加者の発言に注意を払わなくなるかもしれないし、一方的に特定の参加者にばかり質問をするかもしれない。哲学カフェで何かありがたい話を聞きたいと思っている人と何かありがたい話をしてやろうと思っている人が居合わせると、そこだけで関係が閉じてしまいカフェそのものが台無しになってしまう。そのため、お互いに知っている者同士であったとしても「先ほど発言された方」「そちらの帽子をかぶっておられる方」のように話す工夫が必要になる。

### 2.3. 専門知識は不要

さらに、専門用語が飛び交っているような哲学カフェもよい哲学カフェとは言えないだろう。専門用語を使うと、それを知らない参加者は議論に参加できなくなってしまう。専門用語を使うことで、それを知っている自分を高みに置こうとする参加者や、難解な表現・言い回しを多用して他の参加者を煙に巻こうとする参加者がたまにいる。ところが、よくよく話を聞いてみると、そのことばをよく知らなかったり、誤解していたりすることが少なくない。哲学を実践する上で重要なことは、自分のことばで語ることである。自分の言葉で語れ

---

<sup>2</sup> 他人を誹謗・中傷するものでない以上、参加者が自らの所属や名前を話すことを進行役が禁止することまではできないだろう。ただ、参加者が所属や名前を話すことを禁止しないとしても、参加者同士が平等であるということをはっきりと伝え、そのことを参加者同士でしっかり共有できるようにしておくことは重要である。

ないのは、ことばが上滑りしている状態だと言えるだろう。

確かに専門用語を自分のことばで言い直してもらえば専門用語を使っても構わないという考え方もあるだろう。だが、専門用語を使った者にその用語の説明を求めると、そこには「教える／教えられる」という関係が生じてしまう。そもそも本当に平易なことばで説明できるのだとすれば、そもそも専門用語を使う必要はないはずであるし、平易な言葉で説明できないのであれば、その用語を使った本人がその用語を十分に理解していないか、理解していたとしても少なくとも他の参加者とは共有できないものだということになるだろう。したがって、専門用語は使わないようにするというのが公共的対話としての哲学カフェの重要な条件であり、専門的な知識がなくても参加できるのが哲学カフェの特徴である。

#### 2.4. 発言や参加を強要されない

哲学カフェは学校の授業でもなければ会議でもない。したがって、そこに参加しているからといって必ず発言しなければならないわけではない。参加の仕方は様々で、たんにその場において人の話を聞いているだけという参加の仕方もあるだろう。学校の授業では指名されて何かを答えさせられることがあるだろうし、会議では積極的に意見を述べるのが求められる場面もあるだろう。ディスカッションでは参加者がひと通り意見を述べるよう求められることもある。だが、哲学カフェにおいては決して発言を強要されることはない。哲学カフェは参加したい人が自由に参加して、退席したい人は自由に退席できるものである。したがって、誰も哲学カフェに参加する他の参加者に対して発言を強要したり、その場にとどまるよう強要したりすることはできない。

#### 2.5. 参加も退場も自由

対話が成り立つためには会場がどのような場所なのかという空間的要素も重要である。例えば、哲学カフェを貸し会議室のような閉じた部屋でやったとしたらどうだろう。初めて参加しようとする人は参加しづらいだろうし、そうでな

くても途中で出たり入ったりするのに抵抗を感じるだろう。哲学カフェをやるならば、できるだけ開放的な空間で、外から何をやっているのか確認でき、自由に出入りできるような場所が望ましいだろう。また喫茶店など飲食店で開催する場合には、喫煙か禁煙かにも注意を払ったほうがよい。さらに、店内の他のお客さんに迷惑にならないか、店内は騒がしくないか、音楽がうるさくないかなども注意を払いたい。

また、哲学カフェでは机やイスの配置にも重要な意味がある。小中高等学校の教室や大学の講義室のように机が一方向に向かって並んでいるところでは、対話は極めて起こりにくい。対話をする上で重要なことは、お互いの顔が見えるということである。机の有無はともかくとして、椅子は多少自由に動かして自分の位置を微調整できるぐらいの方がよいだろう。一度座ったら途中で席を立ったり抜けたりできないような配置もよくない。哲学カフェは参加したいときに自由に参加でき、退出したいときには自由に退出できるのでなければならないからである。

さらに、事前登録がないと参加できないようにすると、参加のハードルが高くなってしまふことにも気をつけたい。住所、氏名、職業、年齢、連絡先などを主催者に知らせなければ参加できないイベントは、それだけで参加のハードルを上げることとなり、参加者を選別することにもなるだろう。まして特定の会員だけしか参加できないようなものは公共的対話とは言い難く、哲学カフェとも呼べないだろう<sup>3</sup>。

### 3. 進行役の役割

哲学カフェにおいて進行役は何をすべきなのか、あるいは進行役はどういう役割を担っているのだろうか。この問題については、これまで哲学カフェを主

---

<sup>3</sup> これまで取り上げてきた哲学カフェの特長は、あくまでも私の考えるものであり、異論もあるだろう。ここで私は哲学カフェを公共的対話の一つとして捉えているが、もし哲学カフェを対話の方法や内容によって区別しようとするならば、参加者の属性に関わらず哲学カフェと呼べるものは成立し得るだろう。

催したり進行役を経験したりしてきた者のなかでも特に意見の分かれるところである。少なくとも進行役が参加者に対して何かを教示したり議論を誘導したりするようなものではないという点では大方の合意が得られるだろう。こうした人は講師と呼ばれたりいかさま師と呼ばれたりする。

それでは参加者の発言を整理したり、要約したり、あるいはわかりやすく言い換えたりするのが進行役の役割なのだろうか。これはおそらく意見の分かれるところだろう。これまでに出てきた意見や発言を整理するという時点で、すでに進行役の意識、主観、偏見、解釈、意見といったものが入り込んでくるし、要約、言い換えに至ってはなおさらである。もちろん私は哲学カフェにおいて進行役の主観を一切排除すべきだとかそうしたことが可能だとか主張しているわけではない。ただ、進行役が参加者の意見や発言を整理したり要約したり言い換えたりすることがどういう意味をもつのかということについてじっくり考えておく必要があるということを指摘しておきたい。進行役のいない哲学カフェというのも、あるいは考えられるかもしれない。ともかく、参加者とは違う立場の者として進行役を哲学カフェに置く以上は、少なくとも進行役にたんなる参加者とは違う何らかの役割が与えられていると考えるべきであろう。

例えば、哲学カフェでとにかく自分の話をしたいという人がいる場合、進行役が介入しなければごく限られた少数の参加者が延々と話し続け、他の参加者はそれを黙って聞いていなければならないという状況も起こりうる。もし他の参加者がただ人の話を聞いていただけならよいのだが、ずっと誰かが話しているためになかなか意見を言い出せないということもあるだろう。進行役は発言したくない人に発言を強要しないように注意しなければならないが、同時に発言したいのに発言できない人が発言しやすいように促すことも重要な役割の一つではないだろうか。そのためには、淡々と場を仕切っていくだけでなく、たまにはじっくり時間をおいて発言を希望する人が出てこないか様子を見ることも大事である。

また、哲学カフェでは沈黙が続くことがしばしばある。そして沈黙は実にいろいろな状況で起こりうる。例えば、哲学カフェが始まって誰かが最初に発言

するまでのあいだ、あるいは参加者がとても長い話をしたあとや参加者の発言がその場にいる人たちに理解不能だった場合、ほかにも上から講釈を垂れるような発言のあとや非難したくなるような発言のあとなどに沈黙は起こりやすい。だが、沈黙が起こるからといって、あるいは時間が無駄に過ぎるからといって、むやみに進行役が気の利いたことを言おうとしたり、無理に発言を促したりしない方がよいこともある。もちろんそうした方がよいこともあるだろう。どういうときにそうした方がよく、どういうときにそうしない方がよいのかについてははっきりした基準はないかもしれないが、沈黙にもそれなりの意義があるということを意識して、あえて沈黙を破らないようにすることも、哲学カフェの進行役に求められる役割の一つなのかもしれない。

#### 4. 哲学カフェの苦手なもの

ここで哲学カフェにも苦手なものがあるということを指摘しておきたい。例えば数字やデータをもとにして議論するような問題は哲学カフェには馴染まない。哲学カフェの基本はあくまでもその場で参加者全員が共有できることばで話すということだからである。例えば、原子力発電所のあり方について考える際に低線量被ばくが健康に及ぼす影響や、捕鯨の問題について考える際に捕鯨が鯨の数や生態系にどれだけ影響を及ぼすのかといった問題は、その場で議論して答えが出るようなものではないだろう。また、仮に答えを知っていると自認する参加者がいたとしても、その参加者の発言が正しいのかどうかをその場で確かめることは困難であるし、そうした発言の真偽を確かめようとあれこれ話すことが哲学カフェなのかという疑問も生じてくるだろう。

また、賛成か反対かを直接問うような問題も哲学カフェが苦手とするものである。というのは、テーマが賛成か反対かを直接問うようなものの場合、参加者があらかじめとっていた立場をただお互いに表明するだけで終わってしまい、対話が成立しないからである。哲学カフェの醍醐味は、対話を通じてお互いの違いに気づき、自分がそれまで抱いていた考えを反省することにある。

## 5. 哲学カフェの意義

### 5.1. 対話を通じて相手を思いやる

ある哲学カフェで参加者の一人が「おかしなことを言う人がいたら、進行役はそれを指摘するべきだ」と言っているのを目にしたことがあった。「それは参加者同士で解決してください」といったようなことを進行役は答えていたが、当の参加者は納得していない様子であった。それ以来、私は哲学カフェがどのようなもので、その進行役がどのような存在なのかずっと悩んできた。

哲学カフェについて参加者が考えていること／期待していることは、必ずしも一様ではない。哲学カフェは自由に話したいことを話す場だと考えている人もいれば、論理的に議論をする場だと考えている人もいる。だからそれぞれの参加者が期待した通りの哲学カフェを実現することは、実はなかなか難しい。

そんな折、ある哲学カフェで寄せられた参加者の感想を読んでいて「話がかみ合っていない」と感じている人が少なからずいることに気がついた。そうだとすると「話のかみ合わなさ」について参加者自身に考えてもらえば、参加者の満足できる哲学カフェについて何か得られるのではないだろうか。このような期待を寄せながら「『話がかみ合わない』とはどういうことか?」という哲学カフェを開催した<sup>4</sup>。イスの配置にも気を配り、円形にしてお互いの顔が見えるように工夫した。こうした想いが功を奏してか、この哲学カフェでは参加者一人一人が他の参加者の発言をしっかりと受け止め、そこへ自分のことばを重ねていくようにしてカフェが進行していった。話がかみ合うためには「相手を思いやる気持ちが大切だ」という参加者のことばが象徴的であった。

哲学カフェに参加する人は実に様々で、年齢、性別、職業、教育歴なども一様ではない。難しいことばでは理解できない人、ゆっくり話さないと十分に聞き取れない人、大きな声で話さないと聞こえない人、あるいは長い話についていけない人などがいる。哲学カフェを通じて自分とは違う者の存在に気づき、

---

<sup>4</sup> 森本誠一（進行役）中之島哲学コレクション 哲学カフェ「『話がかみ合わない』とはどういうことか?」（於・アートエリア B1）2011年10月12日。



相手を思いやるきっかけになるのだとすれば、これは公共的対話としての哲学カフェの意義だと言えるだろう。

## 5.2. セーフティーネットとしての哲学カフェ

また、別の哲学カフェでは70代のある参加者から次のように言われたことがとても印象的であった。そのときの発言を正確に覚えているわけではないが、およそ次のような内容のものであった。

仕事も引退し、普段は何も考えることなくぼーっとテレビを見てボケ老人をやっている。ただ、2ヶ月に一度この哲学カフェに参加するときだけ、昔と同じように頭が120%回転している。

ある90代の参加者は哲学カフェに参加してもほとんど発言することはない。それでも2カ月に一度「生存確認のために来た」と冗談を言って参加している。かつては庶民の社交の場であった床屋や銭湯も、生活様式の変化にともなってその機能を失ってきた。もし哲学カフェやそれに代わるものがなければ、歳をとり、仕事を辞め、一緒に暮らす家族も少なくなり、近所付き合いや出かけることも少なくなってきた人にとって、社会との接点は限りなく少ないものとなるだろう。哲学カフェは対話そのものではなく、対話をする場所、人とふれ合う場所を提供するという意味で、社会の役に立っていると言えるのではないだろうか。

## 5.3. 公共的対話としての哲学カフェ

これまで論じてきたように、哲学カフェは人びとが公共的な場所に集まって共通のテーマについて対話するものである。参加するために特別な資格を要さないという意味で、哲学カフェの参加者はごくふつうの市民だと言えるだろう。確かに哲学カフェで取り上げられるテーマは必ずしも公共的なものとは限らない。だが、お互いに知っている人も知らない人も同じテーマについて話し合ったり議論したり、対話をするために集まるという点において、哲学カフェには一定の公共性が伴っていると言うことができるだろう。まして、上述のように

人びとが集まって議論する社交の場が少なくなっている現在にあって、公共的対話の場を提供するという哲学カフェの意義は決して小さくはないだろう。

## 6. 対話の暴力性について

これまで対話の肯定的な側面を取り上げてきたが、対話の否定的な側面についても触れておきたい。対話は時としてある人びとにとっては暴力的に作用することがある。暴力的というのは、ある人びとを排除したり、非難したり、ある人びとに何かを強要したりするようなものとして働くものことである。本節では対話の暴力性について論じることで、対話の輪からこぼれ落ちるものについて考えたい。

### 6.1. 対話の条件による暴力性

まず、対話の条件がある人びとにとっては暴力的に機能することもあるという問題について考えてみよう。例えば対話がどこかの物理的な空間で行われるとすれば、移動に困難を伴うなどの理由によって対話の行われている場所まで来ることができない人たちは必然的に対話から排除されることになるだろう。もし対話の場が物理的な空間に制限されずインターネットを介してどこからでも参加できる仮想的空間にも広がっているのだとすればどうなるだろうか。その場合でも会場に居合わせる人とオンライン上で参加する人とのあいだに対話する上で何らかの違いがあるのではないかという疑問が生じてくる。もちろんどこかの場所に集まって対話が行われるとしても、その人が占める位置によってすべてが対等で対称的というわけではないだろうから、オンラインとオフラインとの差がどれほど重要なのかという視点もあり得るだろう。

また、対話がかたがた音声言語に限られている場合はどうだろうか。声を出すことに障害がある人、聴覚その他に障害がある人、あるいは人前で話すのが苦手な人たちが対話から排除されることになるだろう。苦しい体験をしてそのことを語りたがらない人はどうだろうか。

もちろん、あらゆる人を一度に包摂できるような対話は現実的には不可能な

のかもしれないが、どのような環境・条件であればどのような人が参加しやすいのかといった視点を持ち続けることは重要であるし、様々な条件で様々な対話を実践することによって、できるだけ多くの人が参加できるような対話の場を作っていくことが求められるだろう。

## 6.2. 合意要求の暴力性

対話はどのような目的で行われるのだろうか。たんに誰かと誰かが意見を交換して終わりなのだろうか。それとも何らかの目的で、どこかに向かって共同で行われる営みなのであろうか。もし対話が合意を形成するために行われるのだとすれば、そもそも合意形成をしたいと思わない人たちにとって対話は否定的なものとして作用するだろう。ましてや合意を形成するために自らの立場を変えるよう求められる人たちにとって「話し合ひましょう」「対話をしましょう」と呼びかけること自体が暴力的に感じられるかもしれない。裁判などで和解を望んでいない人に和解を呼びかける行為も同様である。

哲学カフェは決して合意を形成することを目指すものではないが、もし対話によって合意を形成しようとするならば、注意が必要である。

## 6.3. 論理性・合理性要求の暴力性

対話はどのような仕方で行われるのだろうか。もし対話が論理的・合理的に進められるのだとすると、それは誰がどのような権威のもとに決定するのだろうか。多くの場合、対話は論理的・合理的に進められ、感情的・非合理的なものはそこから排除される。だが、対話が論理的・合理的に進められるとして、そうあるべきだと決めるのは誰なのか。また、それはどのような権威のもとにどのような仕方で行われるのだろうか。ここには対話が要求する論理性・合理性についての問題がある。泣くことでしか自己主張できない赤ちゃんや痴呆症の人は対話から排除されることになるだろう。声は出せないけれど顔を真っ赤にして全身で怒る人、大声を出して怒鳴ることで自己主張する人なども感情的・非合理的なものとして対話から排除されるだろう。

## 7. おわりに

本論文では哲学カフェを公共的対話の一つとして捉え、その特徴と意義を明らかにしてきた。哲学カフェは誰もが自由に参加することのできる公共的な対話実践の一つであり、そこでは職業、年齢、性別、教育歴といった個人の属性に関わりなく、誰もが平等に議論することのできるものであった。とはいえ、対話という形式をとることで排除されてしまうものも存在した。例えば、対話の場所、方法、規則は、そこへ参加できる人びとを限定する条件として働いてしまうのであった。だからといって対話と公共性が全く相容れないということにはならないだろう。哲学カフェのように一定の公共性を伴った対話もあれば、対話以外の手段によって担保される公共性もあるだろう。ただ、人びとが集まって特定の問題について話し合ったり議論したりする機会が少なくなるなかで、公共的な対話の機会を提供してくれる哲学カフェは注目に値するのではないだろうか。